

詩織が玄関を出て登校すると、やがて誠がやってきた。美沙は玄関に走りよって、誠の胸に飛び込んだ。疼くこの身を誠に満たしてほしかった。玄関で抱かれた。

「入れたままにしているかい？」

「ええ」

「点検するぜ。尻をだしな」

「ここで？」

誠は玄関で臀部を露出するように言う。

「そうさ、ここで尻穴の点検だ」

「私、玄関でお尻を点検されるのね・・・」

そう言いながら美沙はスカートを腰まで捲り上げ、詩織のパンティを降ろしていく。

誠が手を突き出す。その手の上に脱いだばかりのパンティを渡した。激しい羞恥心が湧き起る。誠はクロッチ部分を裏返して見る。

「すごい濡らしようじゃないの？ママさんの愛液で、詩織ちゃんのパンティはすっかり濡れているぜ。こんなに感じながら詩織ちゃんと朝食を一緒にしていたわけだ。はははは、なんてエッチなママさんなんだ。美沙の牝の匂いがきつと詩織ちゃんに届いてい

ただろうぜ」

目の前に突き出されたピンク色のパンティから美沙は目をそらした。羞恥に顔を朱に染め、つぶらな瞳は甘美な被虐感に潤んでいる。

「見るんだよ。美沙」

誠の強い口調がとぶ。

美沙は視線を戻した。突き出されたパンティは、ねっとりとした愛液ですっかり濡れている。

「詩織ちゃんに見せたらなんて言うだろう。毎日、ママの愛液で自分のパンティを汚されているって知ったら、どう思うだろうな」

「詩織のことは言わないで・・・」

美沙はうつむいた。

「娘のパンティを穿いてまん汁で汚しているくせに、今さらどうしたの？美沙は、もう詩織ちゃんを裏切っているんだよ。いくら命令だっていっても美沙は自分で従うことを決めて詩織ちゃんを穢しているのにさ。さあ、ここで詩織ちゃんに謝るんだ」

美沙は黙って首を横に弱々しく振った。

「こうやってあやまるんだよ。娘のパンティをまん汁で汚してい

る淫らなママをどうぞ許してくださいってね」

「そ、そんなこと…もう許してよ。」

「さあ、言うんだよ。言わなければ、このまま外に突き出してやろうか？」

「ああ…誠君はひどいことばかりさせるのね」

「そうさ、僕はサディストだからね。そして美沙はマゾだからこうやっていじめられるとぞくぞくするだろ。僕たちは相性がいいのさ。」

「言えばいいのね…あー、詩織さん許して…あなたの下着を汚してしまった淫らなママを…どうぞ許してください…」

「よく言ったね。」

誠の強い力で抱きしめられた。息もできないほどに強く抱きしめられ、美沙は誠の胸に顔をうずめた。誠の唇が重なってくる。舌を差し込まれ、美沙はそれを求めるように口腔に受け入れた。舌を吸われ、唾液が混ざり合う。濃厚なキスが長く続いた。

「お尻…出しますわ」

美沙はスカートをまくったまま、パンティを脱ぎ去った臀部を突き出した。